

作成者: 想田 瑞恵

【2010年6月8日(火)対話についての対話 流れ】

檜垣先生(以下H)：「純粹」を自分の気持ちでやると大変だと思いますね。普遍性を高めるという意味ならいいけど、気持ちって変わるものだし。西洋哲学において感情とは受動で、何か外にある原因によって起こるもののこと。だから、自分自身の感情を他者と切り離して「純粹」にしようとするのは、原理的に無理です。対話において各人の感受性は確かに大事なもののなんだけど、そこを強調しすぎるとうまくいかない。自分の感受性そのものは見えなくて、概念化した形で現れる。何を感じたかにこだわるより、他者に対する意見の中に「自分」が表れると考えてはどうか。対話とは、つまり、必ずしも感受性を尊重するものではなくて、他者に関わる言葉を尊重すること。要するに今言いたかったのは、自分の気持ちを大事にすることより、他人に関わる言葉を大事にすること。もちろんそれは自分の気持ちをよく見てのものなんだけど。

永延さん (以下N)：対話においても自分の気持ちを隠す人はいますよね。対話をする場が大事なのではなく、姿勢が大事だとすれば良いのですかね。

H：そういう話によくなるんだけど気になる。あくまでここでの対話は自分の話で。自分の気持ちをそのまま言葉にするのが大事だということです。

N：それはそうだと思いますね。

H：自分の気持ちを大事にするということは、結局内閉的な個性を大事にするということなんですね。でも、自分のそうしたい気持ちというのは、サnderルさんもカントの回で言っていました、マスコミなどにたいいてい踊らされている。自分のことは、気持ちだけではわからない。

増田さん：「思っていることを言葉にしなければいけない。そこに個性がある」というのはそのとおりだと思います。羽生名人も似たようなことを言っていました。感情というカオスなものから言葉を選ぶこと、そこから個性は始まるって感じですか。

H：まず言葉を選んでいてひとつ能動的。そしてその次に、対話によって選んだ言葉に対して相手はどう返し、自分はそれにどう反応するかということですね。

想田 (以下S)：でも、「自分の気持ち至上主義者」も、共感が重要なコミュニケーションですから、思っていることを言葉にしますし、相手の反応もほしがりますよ。「楽しいね」なら「そうだね」と、「盛り上がっていいこう！」なら「おう！！」と、返すことを期待するように。だから、先ほどの永延さんの問題設定を私はそのように理解したので、よくわかります。相手の「楽しいね」という言葉を本当に信じてもいいのか不安になります。

H：ただ同意するだけならその言葉に意味はないよね。相手に否定されたりつつこまれたりして、初めて自分がわかる。「本心で言わない」ということを貫くなら良いんです。あなたの言うようなその場の空気にあわせて言わないのなら危険だということ。

S：私の「楽しい」という言葉に対して相手も「楽しい」と返したとき。「本当かな」と疑問に思っても、場の空気を大事にしてその疑問を指摘しないコミュニケーションと、その疑問を口に出してもいい対話、という違いですか。

H：「楽しい」と言ったときに、何を楽しいと思っているのか突き詰めていくのが対話。絶対に、互いに違っているはずだから。ぼやかしているから共感できるわけで、何も対立がないなんていうのはありえない。

栗原さん（以下K）：「自分の気持ち至上主義者」って僕のことでもあるんですけど、彼らが自分の感受性を大事にしているのはまあ当然として。そういう対立になるような他者の感受性も大事にしていますかね。

S：本当の意味での尊重はしていない、というのは、前回の増田さんと先生の指摘にもありました。

K：じゃあかきカッコつきの尊重でもいいです。彼らは他者の気持ちを「尊重」しているんでしょうか。

S：「自分は自分であなたはあなた」というレベルの「尊重」はしていると思います。自分を肯定してくれる限りにおいて、それこそ、あなたがどんな本や音楽が好きでもかまわない、という感じな。

H：特別である自分が保たれている限りにおいて、ということなんだろうけど。ここでの「特別」は「他人とは違う」ってことだから、「自分は特別だ」と思うなら、他人に一応関心は持っているよね。他人との比較での「特別」だから。

S：なるほど。本当に自分のことを特別だと思っているなら、むしろ、「そうではない」と指摘するかもしれない他人なんて、排除して引きこもってしまえば良いわけで。特別の維持のためには、他人から完全に離れてしまうわけにもいかないのか。でも、なら、「みんな違ってみんないい」とか「ナンバー1よりオンリー1」に満足しておけばまだ幸せなのに、それもできない。なぜなんでしょう。

K：それは当たり前の気が。だってみんながオンリー1であることを認めたら、結局自分がみんなと同じになってしまう。僕らは個性重視の教育を受けた世代で、個性があるから居場所があるみたいになった。早いうちに「算数ができる」とか「足が速い」とかいう個性を見つけられればいいですけど、そうでない僕はどうしたら、って感じですよ。感受性がみんな違っていたら、「他と違う特別な個性」にはどうしたってなれないですよ。

S：ああ、そのとおりですね。私は、ナンバー1な、つまり特別な感受性の持ち主になりたいくて、だから「みんな違ってみんないい」が嫌だったんでしょう。

K：つまり、「自分の気持ち至上主義者」が救われる一つの方法は独我論者になることです。

S：え、でも他者がいなくてもやっていける独我論者って、「自分の気持ち至上主義者」よりずっと強い別物じゃないですか？

H：徹底しないということでしょう。適当に場の空気を読みつつ、独我論者の姿勢も取るというように。

S : 「独我論者」というキャラになるということですか？

K : ああ、そう。そういうことですね。

S : 一人ぼっちでも「一人でいるのが好き」と言えればいいわけだし。いいですね、独我論者。楽そう。あーでも、もう少し充実して生きたいのだけれど、どうにも人の心が気になってしまう、という場合はどうしたらいいですかね。

H : さっきも気になったんだけど、気持ちに敏感になりすぎていませんか。気持ちは回復できるのに、傷つけられないようにしようとするから駄目になっていく。傷つけても傷つけられてもある意味お互い様で。そうすることで、抽象的な言い方だけど「理解する」。つまり、相手と自分が合意するということ。言葉を交わしても合意できるところが一つもないなんてことはない、と、信じています。そこで得られたものを大事にしていけばいいんじゃないのかな。

S : そうなんでしょうけど、「傷つけても傷つけられてもお互い様」というのは、対話に納得している人の意見な気がしてしまって。そういうのと、無神経や配慮がないというのは、また違うと思うんですけど。

H : いや、その区別がそもそもおかしいでしょう。心の中で無神経だと感じてしまうことは、確かに僕だってあるけれど。そもそも「無神経」というものが本当にあるのか、ということですね。「無神経」ってどういうことですか。

S : 場の空気をよまないことです。

H : なぜ空気をよまなくてはいけないんですか。

S : え？あーと…

H : 「無神経」という言葉を使うことで、「許される」・「許されない」のコードを勝手に作ってしまっている気がする。

S : 「なぜ空気をよまなくてはいけないのか」には驚きました。自分の感受性が不快だと思うことを、「無神経」という言葉を使うことで、公的に認められるべき不快なことである、と言おうとしているんでしょうか。

H : 自分の感受性そのものの正当化はよくないですね。感受性は確かに事柄として特別なんだけど、他人の気持ちを認めずに、自分の気持ちが特別だ、価値が高い、優れていると思ってもね。他人の感受性を尊重していないから、価値の低いものに承認されたことになってしまって、結局満足できない。

S : ああ、なるほど。感受性に個性を見出そうとしては駄目ですね。

H : というかそもそも、「個性」という言葉がよくないですね。さっき栗原さんも「個性があるから居場所がある」って言っていたけど、「個性」という言葉が諸悪の根源な気がする。

S : いや、それはちょっと抵抗が。それに、たとえ「個性」という言葉がなくなっても、似たような言葉がまた現れてしまう気がしますね。とにかく、「個性」がなくなるのはちょっとなので、せめてアイデンティティと個性は区別しなくてはいけない、くらいにしてください。その場の気持ち重視の個性では、自己同一性たるアイデンティティにはなりえない

いということ。

H：でも「そのままでいてもいいよ」という形での個性も危険だし。やっぱり、もう10年位前から言っているけど、「個性」という言葉はよくないよ。あと「自己実現」という言葉も。10年前は、「これは別にいいんじゃない？」と思っていたけど、やっぱり駄目ですね。当時批判していた人たちと同じ意味で批判しているかはわかりませんが。

S：公的にも、「人それぞれ」という個性はまだ強調されていますね。菅新首相は、影響を受けた本として、檜垣先生が脳手術の王国の例で使ったハックリーの『すばらしき新世界』を挙げていて、「幸福は人それぞれだから、政府は大きな不幸を減らして『最小不幸社会』を目指そう」というようなことを話していた。でも、特別な、私だけのものとして（あるはずの）幸福が手に入れられなかったらどうしたらいいんだろう、と思ってしまいました。

H：権力はそういうことを語ってはいけないうね。そういえば、前回のまとめの『キャラ化する・される子どもたち』というのも土井先生のですか。

S：はいそうです。異質なものと向き合う対話的態度を強調していて、実践的なまなざしが『友だち地獄』よりも増えています。

H：それはいいね。今までは、分析は本当にすごかったけれど、「じゃあどうすれば」という提示がなかった気がするからね。

S：ただ、そうしたコミュニケーションから脱するために、「特異な経験」というものを持ち出していたのは気になりました。「何をしたか」に重点を置いては、トラウマ自慢と同じです。

H：経験の絶対視は危険ですね。宮台真司も前から言っているように、自分が表現したこと何でもいから、肯定されたり否定されたりを繰り返す。ここ勘違いされやすいけど、否定されてもいいんですよ、ただし、表現の否定を人格そのものの否定に結びつけないかぎりにおいてですが。自分の表現に反応をもらうということを重ねていって、自尊心を獲得していけばいいんじゃないかな。

S：ちょっと納得できない面が。「自分の気持ち至上主義者」も、気持ちを表現して反応をもらうという、見た目は同じことをしているはずなのに、なぜ自尊心（自己肯定感）が獲得できないんでしょう。

H：「自分の気持ち至上主義者」が望むような、他と違う「特別」という形で手に入れることはできないですからね。だから、「そのままでいてもいいよ」という形での個性が危険なように、「君はそこにいていいんだ」という言葉もおかしいです。「個性」が行き過ぎて、「ありのままでいいんだよ」と水谷先生みたいな人が言い出したんだろうけど。たまに「ありのままでいいというのが対話なんでしょ、知ってます。なのになぜ否定したりして、ありのままの私を受け入れてくれないんですか」という学生さんがいるんだけど。本来、「ありのままでいい」と対話は真逆のベクトルで。「ありのままでいい」はプライベートなもの。たとえば、今この教室で「ありのままでいいんだよ」と僕が言ったとして、麻薬をやって捕まった人がいても放っておいていいのか、ということ。何があってもその人

を見捨てないという覚悟がある人しか、この言葉を言うてはいけないと思う。水谷さんは覚悟しているみたいだけどね。ありのままで、そのままの自分でいいんだと、自分で意識するのはまずいですね。なおかつ、そのままの自分を相手にも受け入れてほしいなんて、要求することがそもそもできないです。たいして対話はパブリックな関係で、プライベートとパブリックは区別しないといけない。プライベートにおいて対話は必要ない。言葉を交わすことすら必要ない。その代わりそれは一生ともにいて面倒をみるという大前提がある。今この教室にいる人たちの面倒を一生みる気がありますか、ということですね。

S: でもやっぱり「ありのままでいい」は、ある意味対話を示していると思うんですけど。対話によって無条件の承認を得られますよね。

H: 無条件ではないでしょう。否定されますよ、たくさん。

S: 確かに内容は否定されますけど、そこにいる私というか、私がそこにいることは、無条件で承認されませんか。

H: 確かにね。「何があっても否定されない」というのではなく、「何を言ってもいることを認める」ということですね。佐藤さん、どうですか。

佐藤さん: ええ。そうだと思います。

H: 永延さんは？

N: そうですね。どちらにしても、自分というものや個性を、強く意識しすぎている気がしました。私も水谷さんの本を読んだことがありますけど、否定されている人に対して、「ありのままの個性でいいんだよ」と言っていますよね。だからやはり、個性に重きを置くことに問題があると思います。

H: 個性ということ言うなら、何を嫌いでも好きでもかまわないということは僕も言っています。ただし、その感受性に特別なものなどではなくて、感受性に優劣はつけられない、ということですね。でも、自分の感受性を語るときにはそうもいかない。支持を得られた意見とそうではない意見がある。もちろんそれらは、確定はしていませんが。だから、「ありのままでいいんだ」は違うのだ、ということですね。結局、社会性や共同性が必要なんだということなのだけど、こうした言葉を安易に使いたくはないんですよ。たいてい、粹や空気に従えという、よくない意味になっているから。どう言えば良いかな。

S: 弱肉強食的につぶされたくなかったら、ということになってしまうんでしょうか。ただ、「そのままでいい」は言い方が違うというだけで、残してはほしいですね。なんというか、この言葉は、個性を見つけれなかったものたちの最後の砦というか。それまでなくなってしまうたらどうすればという感じです。

H: ちょっと見えてきた。「ありのままでいいんだ」という人は、条件付けはよくないと言いたいんですね？

S: そうですね。

H: もちろんそれはそのとおりなんだけど、気に入らない条件付けはすべて受け付けない、というのではなく、別の条件付けを対話を通して作っていく必要があると思いますね。